

幕末明治の写真師列伝 第二百二十五回 宮下欽 その四十三

「六月九日 曇

一、(前略) ○宮下同第六時過蛭子氏へ行、同第十一時前帰ル、(後略)」

「六月十日

一、(前略) ○[午後七時前(六時過)]宮下、蛭子氏へ御廓内景色ブック持参し所書相頼、大半記シ同第十一時前帰ル、(後略)」

「六月十五日 晴

一、(前略) ○第十一時頃宮下親類之者一人来ル、同人[紙取]写真致し遺ス、午後過帰ル、」

「六月十七日 晴

一、(前略) ○午後第七時過宮下、蛭子氏へ行、同第十二時帰ル、」

「六月廿日 雨

一、第八時過与三郎(註：新潟初期の写真師・高木与三郎のことであろう) 国元へ出立ス、先生御出立之節被仰置候旨ニ付、浅沼や(屋)方御買入之人物取鏡一ツ外ニ内田氏方引取置候白鷄卵紙百枚并大惣(註：大坂屋惣吉のこと)・内田(註：内田九一のことであろう)・浅沼や等方薬品色々過日中受取置候分爲持遺ス、此外ニ道中金として九円遺ス、且又同人国元之兄新潟宿町十四軒町近江や(屋) 金七へ、与三郎今日出立致し候旨急用之郵便を以て申越ス、与三郎板橋宿方人足を以申越ニハ、写真用ニ金子遺払之帳面失念致し候間、郵便ニ而差出し呉候旨頼越候ニ付、正午過郵便ニ而右帳面遺ス、○午後第五時頃宮下親類之者一人、外ニ一人同道ニ而来リ、右同時過帰ル、(後略)」

この「六月廿日」の記述で、与三郎のことが書かれていることは重要なことと思われる。新潟の初期写真師・高木与三郎が横山松三郎の弟子であったことがこの記述内容で判り、その開業時期も明治6年頃ということになる。新潟は幕末の開港五港の一つで、写真館の開業も早く、明治の新潟の写真界は、高木写真館を先駆者としている。

「六月廿一日 雨天

一、牧野氏家移ニ付、為手伝宮下八時頃行候所、雨天ニ付延引ニ相成候へ共右用意取片付等致し、午後第四時頃帰ル、(後略)」

「六月廿二日 曇昼後方晴

一、第十時半頃大山、工藤氏へ病氣見舞として行、尤昨日同氏方大山へ郵便を以て、兵太郎殿病氣之旨申来ルニ付而也、午後第六時過帰ル、○牧野氏今日家移リニ付、宮下ニ手伝頼度旨使来ル、午後第一時頃行、同第十一時過帰ル、(後略)」

「六月廿四日 雨天

一、(前略) ○第八時過加納氏留主居之衆来ル、夏雄(註：加納夏雄のこと) 殿形之 天子之 御劔出来ニ相成、上方より参リ両三日内ニ納候間、今日家内之者参リ拝見致し候様と申呉候ニ付、午後第四時過、大山・宮下兩人ニ而拝見に行、同第五時頃帰ル、(後略)」

「六月廿五日 曇

一、(前略) ○宮下午後第二時半頃事務局へ行、先月分上納残り二拾両、来ル廿九日迄日延致し、帰り松崎氏(註：写真師・松崎晋二のこと)へ立寄、同第六時頃帰ル、(後略)」

「六月廿九日 雨天

一、第九時半頃宮下、中田(註：写真材料商、中田清次郎の中清のこと) 江行候、いまた(未だ) 金子間ニ合兼候間、昼後持参致し呉候旨ニ付正午過帰ル、(後略)」

「六月卅日 雨天

一、第十時前宮下、中田(註：写真材料商、中田清次郎の中清のこと)へ行候所、約束之金子手達致し、至急之用ニ難相立、いつれ(いづれ) 来ル四日頃ニハ無相違出来可申旨ニ付、右迄延致し呉候様断リニ付正午過帰ル、(後略)」

「七月二日 曇

一、(前略) ○同第八時宮下、亀井氏へ行、夫方吉五郎へ写真差木格入こ(いれこ) [拵]頼ニ行、同第十一時頃帰ル、(後略)」

「三日晴天

七月三日 晴天

一、(前略) ○第十一時前宮下事務局へ行、金二拾両、去[々]月之分二拾両上納致ス、午後第一時頃帰ル、○午後第六時前宮下、牛込牧野氏へ行、同第十時頃帰ル、○」

「七月四日

一、(前略) ○午後第十時頃扱所方即時可罷出旨使来ル、宮下一同行候所、池ノ端茅町[一丁目]九番[地]桐野氏家敷内草之内ニ捨有之候旨、唯今訴有之候所、紛失之品と 寄候間、明朝同家へ行、能(よく) 見候様沙汰有之、同第十一時頃帰ル、」

この日、池之端茅町七番地の横山松三郎の家へ泥棒が入り被害にあっている。その時に盗まれた物の一部が、池ノ端茅町一丁目九番地の、桐野氏の家敷内の庭で見つかっている。

「五日 晴

一、第九時過おます(増) 殿・宮下一同、桐野氏へ行、品物見候所、昨晚被盜候品ニ相違無之ニ付、桐野氏従者一同ニ扱所へ行其段申、同第十時頃帰ル、(中略) ○午後第二時前宮下親類之者、外ニ一人同道ニ而来ル、写真致し遺ス、同第三時頃帰ル、(後略)」

「七月七日 晴

一、第九時過宮下、松崎氏へ行、夫方尾張町石川へ行、手札取硝子註文致し、午後第二時頃帰ル、(後略)」

【参考文献】

堺時雄『新潟明治大正文化研究会叢書第一集 父 金井弥一と我が来し方 明治の写真師』(新潟明治大正文化研究会、昭和63年)

(※「方」は平仮名の「よ」と「り」の合字)

(森重和雄)